馬の歴史

かつて名倉駒と称せられる馬がこの地にいたそうです。今では見かけなくなりましたが、名倉駒の起原は平安時代まで遡るそうです。『続日本紀』には、嘉祥二年（８４９）三河守護従五位下安部朝臣氏主が時の仁明天皇四十才を奉祝して白馬四十頭を献上したとあります。これを名倉駒の起原と『三河国名所図絵』本に書いてありますが。さて日本には太古の時代から馬はいたのでしょうか。日本に関する最古の中国側文献として邪馬台国の女王卑弥呼の名前が出てくる『魏志倭人伝』に、「其の地には牛、馬、虎、鵲無し」と記述されている。日本列島には本当に縄文・弥生時代を通じて馬は存在しなかったのか。今まで縄文時代の貝塚や遺構から馬の骨が出土していて、その時代の骨ではないかと言われていた馬の骨をフッソ年代法や炭素一四法で調べると、いずれも古墳時代以降のものであることが近年明らかになっています。

ではいつ頃、どこから、どのようにして渡って来たのでしょうか。四世紀後半から五・六世紀の古墳時代に、突然馬の骨や古墳から馬の埴輪や馬具が多量に出土し始めます。四世紀後半に朝鮮半島に起きた戦乱から逃れようと、多くの亡命者や移住者（渡来人）が倭（日本）にやって来ました。彼らが筏あるいは丸太船に棚板を取り付けた船で春の繁殖期を過ぎ、受胎した牝馬などを連れて北九州に上陸したのが先駆けではなかったのかなどと想像します。彼らは多くの先進技術を日本列島に持ち込みました。

以前古代史研究会の一員として福岡県の竹原古墳を訪れたことがあります。その壁画には舟に載せられた小型の馬が描かれていました。その手綱を取る人の衣装や乗馬靴は、高句麗や北方ユーラシア騎馬民族の影響を受けているとの説明があり、馬の渡来経路の一面を見ました。

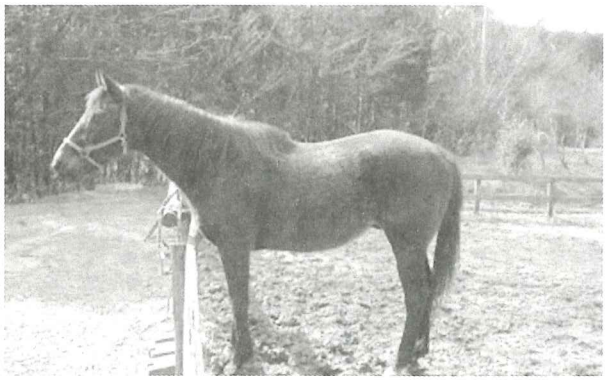
こうして入って来た馬は瞬く間に東国まで伝播されました。埼玉県さきたま古墳群が復元された折も見学に行きました。前方後円墳である稲荷山古墳や将軍塚古墳から様々な副葬品が出土しました。その中に立派な鞍や馬冑、轡、鈴杏葉、環鈴などの馬具セットがあることに驚かされました。まだ馬は限られた権力者の威信財であったと思われます。一般に普及したのは七世紀の後半になってからでしょう。七〇〇年、文武天皇が諸国に牧場を設けるよう命じてから近畿を中心に官牧が定められ、平安時代には甲斐・武蔵・上野・信濃などの国々にまで広がりました。

ずっと時代は下り戦国時代に来日した宣教師ルイス・フロイトの日本の馬に関する記録を紹介します。「欧州の馬は美しいが日本の馬は劣っている」「馬は立って寝ている」「蹄鉄を打たず草鞋を履かせている」と。

我が家はサラブレッドを一頭飼っていますが、サラブレッドは江戸末期に西洋から輸入されたもので、それまでは日本には木曽馬のような小型の馬のみでした。武田信玄が跨ったのもそれでしょう。在来馬は骨や蹄が堅いので日本では蹄鉄の文化が芽生えなかったのでしょうか。馬は立ったまま半覚醒、半睡眠を繰り返しています。伏臥、横臥することもありますがわずかな時間です。

戦前に軍事教練の一つに名倉小学校からバンザイ峠間の往復の競馬が行われていたそうです。「各自の名倉馬を持ち寄る中、清水の後藤治夫さんが飼っていたサラブレッドを借りて競馬に出た所、断トツの一位だった」と市場口の後藤護雄さんが愉快に語っていたのを思い出しました。スピードでは劣る名倉馬も「始終坂道を歩き山野に放牧するので体格健全、蹄も良く忍耐力が強いので箱根越えの荷物運搬は名倉馬に限る」と『名倉村地誌』に記されていると『三州名倉』に紹介されています。

奥三河の山間の労働力にはなくてはならなかった存在の馬は、人と同居し大切に管理されていたことを奥三河郷土館で目にすることが出来ますので、是非足をお運び下さい。



（設楽町文化財保護審議会委員
塚本　洋子）